

# 第 18 話 明治天皇の崩御と大正天皇の即位

こくうんりゅうしょう ひほう どうてん  
 国運隆昌のおりから、突如として一大悲報が全国民を動転させる。  
 せいとく そうぎ のぎまれすけ じゅんし  
 明治天皇のご盛徳と大業。大葬儀の日に陸軍大将乃木希介が殉死する。  
 しょうけんこうたいごう ほうぎょ りょうあん たいしょう  
 昭憲皇太后の崩御、再度の諒闇が終わって、大正天皇が即位の大礼を  
 あ  
 京都で挙げる。

## 明治天皇の重患

明治 45 年 7 月 19 日、明治天皇は俄かにご不例に陥られ、翌 20 日、重患の旨が発表された。国民の驚きは一方でなかった。晴天の霹靂どころの騒ぎではなかった。日頃至ってご健勝の玉体と承っていたし、まださしてご老齢と申し上げるほどでもなかったし、殊に東京市民はその数日前の 7 月 10 日に東京帝国大学の卒業式にご臨幸になったのを親しく拝観したばかりだったので。やがてご快癒なるはずと信じながらも、その後の日々のご容態の発表で、次第によろしくないのを見ると、国民はみな憂苦措くところを知らず、上下こぞって、真心をこめて、ひたすらご平癒を祈り奉った。

殊に宮城の正門外には、折からの炎天を事ともせず、いくばくとも知れぬ老若男女が陸続と集まって来て、地上に跪いて皇居を拝し、夜を徹して祈りをこらす者が日を追って増すに至った。その他、全国至るところの神社、寺院で、思い思いにご平癒を祈る者はもとより数知れないほどでした。

## 崩御

しかし、28 日に至って、容態が急変され、その夜、深更、皇后は、宮中振天府脇に新たに設けられたご祭壇で、親から伊勢の神宮に聖上ご平癒の祈願をされたのですが、翌 29 日にははいよいよ危篤に陥られ、こうして近親の看護も、国民の熱誠も、名医の力もその効なく、7 月 30 日午前零時 43 分、天皇はついに崩御された。御年 61 でした。



めいじてんのう  
明治天皇

国民の悲しみは例えようもなく、殊に輦轂の下にある東京市民は、悲歎、恐懼のあまりに、いかんともする事が分からず、ただ宮城の前に集まって、砂に頭を埋めて涙を流して慟哭するばかりだった。世界列国もまた天皇の偉業をたたえて、惜しんだ。今、その一端を「ロンドン・タイムス」の記事を見ると、「思うに、世界の歴史の上で、先帝ほど艱難を嘗められた君主は少なからうが、又、先帝ほどよくこれに耐えて、常に成功された君主は無からう。実に先帝は大時世における大帝王で、天皇の名は永遠に人

## 第 18 話 明治天皇の崩御と大正天皇の即位

類の記録に留まるであろう、』と讚歎している。

### ご実績

実に天皇は御年16才という幼少の身をもって、正に国事の最も多端を極めていた慶応3年正月9日に踐祚されてから、万機を統べること46年。はやく維新の大業を創めて熱心に政治をなされ、内には、憲法を布き、法制を整え、交通を開き、産業を興し、又、教育に関する勅語を下して国民道徳の大本を示され、外には、条約を改正して諸外国とますます交わりを厚くし、正義の戦いに勝って国威を張り、領土を広めて、ついに我が国を世界における一大帝国とならせたのです。

天皇はまた常にみづから節約を守られ、険素をもって衆を率い、又、万民を慈しんで、朝夕ただその上に大御心をかけられた。実にそのご盛徳とご大業とは、古今東西を通じて嘗てその類を見ません。

いにしへのふみ見るたびに思ふかな	おのがおさむる国はいかにと
とこしへに民やすかれと祈るなる	我が世をまもれ伊勢の大神
すえついにならざらめやは国のため	民のためにとわがおもふこと
照るにつけ曇るにつけて思ふかな	わが民草の上はいかにと
暑しともいわれざりけりわきかへる	水田に立てる賤をおもへば
冬深きねやのふすまを重ねても	おもふは賤が夜寒なりけり

これらの御製を拝誦するにつけても、そのおぼしめしの深いのに、我々は感激の涙を覚えます。

### 大正天皇の踐祚

明治天皇がお崩れになると、皇太子嘉仁親王はただちに踐祚され、第123代大正天皇とられた。時にお年は34でした。すなわち先帝のお定めになった一世一元の制によって、年号を大正と改められ、7月30日、天皇は文武百官を宮中正殿に召して朝見の儀を行われ、勅りして、

皇祖皇宗の遺訓にしたがい、憲法の条章によって統治の大権を行い、以って先帝の偉業を失墜しないように思うに就いては、諸役人もすべからく先帝につくした所をもって朕に事え、臣民もまた一致協力して忠誠をつくすようにせよ

と仰せられた。

内閣総理大臣西園寺公望が御前に進んで奉答して、朝早くから夜まで鍛え磨き、邦家の進運を扶翼し、以って聖旨にこたえるとした。

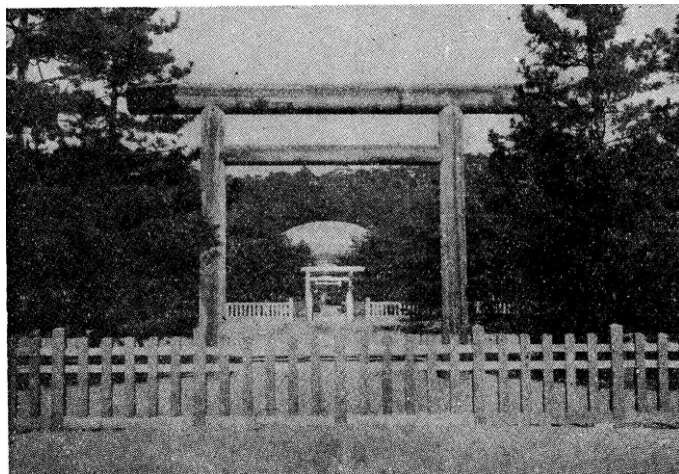
こうして、8月27日に至って、先帝に追号を奉って明治天皇と申し上げ、ついで9月13, 14, 15日の三日間にわたって、大葬の儀を行われることとなり、列国の元首もみな名代の皇族または特派使節が来

させて式に参列した。

ごたいそう  
御大葬

さて、その第一日の 9 月 13 日午後 8 時に、ご霊柩<sup>れいきゆう ほうあん</sup>を奉安する車は、一発の号砲を合図に宮城を出、  
 弔砲<sup>ちようほう ぼんしょう</sup>と梵鐘<sup>ひび</sup>とが全都に響きわたっている中を行列が肅々<sup>しゆくしゆく</sup>として青山の葬場殿<sup>あおやま そうじょうでん</sup>へと向われて、同 10  
 時 20 分、そこにお着きになった。同 11 時から葬儀の祭典が始まり、大葬使祭官長<sup>そうぎ さいてん</sup> 鷹司照通<sup>たいそう しさいかんちよう たかつかさひろみち</sup>がうや  
 うやしく祭詞を奏し終れば、新帝はご霊柩<sup>れいきゆう</sup>の前に進まれて、玉音<sup>ぎよくおん</sup>しめやかにお誄<sup>しのびごと</sup>を奏され、ついで、  
 皇后、皇太后名代の礼拝があり、内閣総理大臣<sup>ないかくそうりだいじん</sup>は百官臣民を代表して誄詞<sup>るいし</sup>を奉<sup>たてまつ</sup>り、こうして一先づ式は  
 終わって、14 日午前 2 時、ご霊柩<sup>れいきゆう</sup>を桃山<sup>ももやま</sup>への霊柩列車<sup>れいきゆうれっしゃ</sup>に移し申した。

同日午後 5 時 10 分、同列車が桃山の仮停車場<sup>かりていしゃじよう</sup>  
 に着くと、ご霊柩<sup>れいきゆう</sup>は葱華輦<sup>そうかれん</sup>によってご稜地<sup>りようち</sup>に奉送<sup>ほうそう</sup>  
 され、その日の宵から翌 15 日の暁<sup>あかつき</sup>にかけて、い  
 とも厳肅<sup>げんしゆく</sup>な斂葬<sup>れんそう</sup>の儀<sup>ぎ</sup>およびご稜前祭<sup>りようぜいさい</sup>が行われ、  
 天皇、皇后、皇太后のそれぞれの名代の礼拝もあつ  
 て、3 日にわたる大葬儀はその終わりを告げた。



ごりよう ふしみももやまのみささぎ  
御陵<sup>ごりよう</sup>は伏見桃山稜<sup>ふしみももやまのみささぎ</sup>といひます。

のぎたいしろう じゆんし  
乃木大将の殉死

京都 伏見桃山稜

ところでこの大葬儀の第 1 日、即ち大正元年 9 月 13 日の午後 8 時、明治天皇<sup>じしや</sup>の轎車<sup>きやうぐるま</sup>が宮城を出られる  
 合図の号砲と同時に、陸軍大将<sup>のぎまれすけ</sup> 乃木希典<sup>じゆんし</sup>が先帝に殉死<sup>しづこ</sup>して、夫人<sup>やいば</sup> 静子<sup>ふ</sup>が大将と膝を並べて共に刃<sup>やいば</sup>に伏し  
 たという壮烈極まる事件が起こった。乃木大将が日露戦争で旅順<sup>りよじゆん</sup>の攻撃に偉功<sup>いこう</sup>を樹てた事を皆さんは  
 すでに知っているが、更に遼<sup>さ</sup>れば、台湾総督として治績<sup>ちせき</sup>を挙げ、日清戦争にも、西南<sup>せいなん</sup>の役にも、ずっと  
 前の戊辰<sup>ぼしん</sup>の役にも戦功<sup>せんこう</sup>を樹てたのでした。

日露戦争の後には、軍事参事官<sup>さんじかん</sup>に補せられ、特に学習院院長<sup>がくしゅういん</sup>を兼任<sup>けんにん</sup>して大いにその校風<sup>こうふう</sup>を革<sup>あらた</sup>めたの  
 で聞こえている。功一級従二位<sup>こう じよ</sup>に叙し、伯爵<sup>はくしゃく</sup>を授けられて、明治天皇の非常に厚い信任<sup>しんにん</sup>を受けていた  
 ので、天皇の御不例<sup>ごふれい</sup>につづいて、ついに崩御<sup>ほうぎよ</sup>されてから、悲嘆<sup>ひたん</sup>、愁傷<sup>しゆうしょう</sup>、措<sup>お</sup>くところを知らなかったが、  
 もはや天皇が神去<sup>かみさ</sup>りました以上、今後の生存<sup>せいぞん</sup>の無意義<sup>むいぎ</sup>、無価値<sup>むかち</sup>をしみじみと感じて、ついにお跡<sup>あと</sup>を追われ  
 たのです。

臣 希典 上

うつし世を神さりましたし大君の みあとしたひて我はゆくなり  
 神あがりあがりましぬる大君の みあとをはるかにをろがみまつる

希典妻静子 上

出でましてかへります日<sup>い</sup>のなしときく けふの御幸<sup>ぎよう みゆき</sup>に逢<sup>あ</sup>うぞかなしき

という大将夫妻の辞世の外に、大将は殉死の心事を明らかにした遺書を残していたが、その第1条に、  
 自分は此度お跡を追い奉り、自殺候段恐入候儀、その罪は不軽存候。然る処、  
 明治10年の役に於いて、軍旗を失い、その後死処を得度心掛候もその機を得なかった。皇恩  
 の厚きに浴して今日まで過分のご優遇を蒙り、追々老衰、もはやお役に立ち候時も無余日候折から、  
 この度のご大変、何共恐入り候次第、ここに覚悟を相定候ことに候。

とある、大将が西南の役に小倉の連隊長として征討軍に加わり、旗手が戦死したために連隊旗を敵に奪われたことは、先に「地方の争乱と西南の役」の話にも少し述べたが、  
 実に、大将はその時以来、常に死処を求めておられたのです。

外人の驚嘆

大将の殉死が一たび世に伝わると、天下を挙げてその誠忠と、夫人の貞烈とに感動して、国民はみな熱涙をもって哀悼の意を表したが、これが外人を大いに驚嘆、感動させた事も述べておく必要がある。



静子夫人

乃木大将

さきに明治天皇のご偉業をたてて讃歎した『ロンドン・タイムズ』は、しかしそれと同時に、この偉大な指導者を喪った後の日本の国運に対して疑いをかけて、頗る悲観的な口ぶりで、日本は今後下り坂に向かうのではないかということを行ったのです。しかし今度、乃木大将の壮烈な殉死を聞くと、忽ちその口ぶりを一変して言った。「乃木大将の自殺は、実に日本を偉大にさせた精神が、今もなお依然として日本に現存していることを明らかに証明するものです。この深遠にかつ厳粛に人心に訴える事柄は、到底西洋人が十分に理解出来ないものだが、しかし、この際、われわれはただ敬虔なる沈黙をもって低頭、礼拝しなければならぬ」と。外人すらこの言があるのです。況してわが国人が武人の典型として大将を仰ぎ、婦人の亀鑑として夫人をたたえて、その誠忠と貞烈とを永く語り伝えていることは改めて言うにも及ばない。

さて、明治天皇の諒闇は大正2年7月30日をもって終わったので、大正天皇は翌3年の秋冬の間において即位の大礼を挙げられる事とされ、その準備に取りかかったが、3年4月、俄かに皇太后（明治天皇の皇后）が崩御されたので、世はまた諒闇となって、大礼は延期された。

昭憲皇太后の崩御

皇太后は前の左大臣 一條忠香の第3女で、名を美子と申し上げ、明治元年12月28日に、立って皇后となられてから45年、明治天皇が曠古の大業を樹てられたのも、一つは皇太后の内助の功が大きかつ

第 18 話 明治天皇の崩御と大正天皇の即位

たからです。 大正 3 年の春、沼津の御用邸で病にかかれ、医療はもとより国民もみな熱心にご平癒をお祈りしたが、ついにその効なく、4 月 11 日に崩御されたのです。 ご追号を奉って昭憲皇太后と申し上げ、5 月 24 日、代々木の葬場殿で大葬が行われ、26 日午前 5 時半、明治天皇の御陵の東に葬った。 御陵は伏見桃山東陵といひます。

皇太后はまた夙に和漢の学に通じられ、和歌には最も秀でられた。

みがかずば玉の光は出でざらむ 人の心もかくこそあるらし

いかさまに身はくたくともむらぎもの 心はゆたにあるべかりけり

思う事いふこと道にあたりなば 神のころもうごかざらめや

などのように、御心を国民の教育、修養の事に注がれた事の拝察される歌も中々多く、深いご仁慈のほどがここにも仰がれる。

後、東京代々木に明治神宮を建てて、明治天皇および昭憲皇太后を祀りました。 国民のここに参拝して敬慕の念をこらす者が日々に絶えないのみならず、今日においては、外人すら我が国に來ると先づここに参拝して、ご威徳を偲び、ご偉業を仰ぐのを常とするようになっていひる。



昭憲皇太后

御即位の大礼

さて、再度の諒闇が終わって、大正 4 年 11 月 10 日、大正天皇は即位の大礼を京都の皇宮で挙げられた。 これより先き、同月 6 日の朝、天皇は三種の神器を奉じて宮城を發輦され、その日は名古屋離宮に駐泊され、翌 7 日の午後に京都の皇宮に安着され、翌日

神鏡はこれを春興殿に奉安されたが、これは即位の礼に最も大切な賢所大前の儀があるためです。 即ち、神鏡は、平素は宮城内の温明殿に奉安して、賢所と申し上げていひるのですが、即位の礼および大嘗祭は、皇室典範第 11 条の定めによって、京都でこれを行ひる事になっていひるために、まづ賢所を京都の皇宮内にお移ししたのです。

こうして 11 月 10 日、即ち、大礼当日の午前に、まづ賢所大前の儀を行われ、天皇は親しくご即位の由を皇祖天照大神にお告げになり、その日の午後、紫宸殿の儀を行われて、あまねくこれを臣民にお告げになった。 即ち広く文武百官および外国使臣を参列させて、高御座に登られ、即位の勅語を下されるのですが、その中に、古來、天皇と臣民の間は、義は則ち君臣で、情はなお父子の如く、以って世界にたぐいひないわが国体を成していひる、願わくば臣民が忠誠その分を守り、励精その業に従ひ、以って皇運を扶けてますます国光をあらわせよといひられた。 まことに畏い極みではありませんか。

勅語が終わると、内閣総理大臣大隈重信は肅々として 18 級の南階に登り、南廂の下に立つ

て、七千万の臣民を代表して謹んで奉賀の寿詞を奏した。そして、それが終わると、また徐ろに南階を下って、万歳播の間ばんざいばん あいだに立って北面して、高御座たかみくら あおを仰ぎながら、参列の諸員さんれつ しょいん3,000 と共に、「万歳」を三唱さんしょう がして賀した。正に3時30分でしたが、この時刻を期して、日本全国の臣民は、津々浦々に至るまで一斉いつせいに万歳しょうわを唱和して聖寿せいじゆの無窮むきゆうを寿ことほぎたのです。



東京 代々木 明治神宮本殿

この日、天皇は詔書しょうしょ くだを下して恩赦おんしやを行われた。又、養老賑恤ようろうしんじゆつのために、全国の臣民中80才以上の高齢者こうれいしやに木杯酒もくはいしゆこうりよう着料を賜ると共に、ご内帑金ないどきんを各府県に頒わかつて、妻夫つまおとと なを無くして孤独こどくな者たちに恵みめぐを垂たれさせられた。又、官国幣社かんこくへいしやの昇格しょうかくを仰せられ、功臣こうしんに贈位ぞうい、叙位じょい、叙勲じょくんの沙汰さたがあった。

大嘗祭

こうして、翌11日には賢所御神楽かしこどころみ かぐらの儀があり、12日には、神宮、皇霊殿じんぐう こうれいでん、神殿しんでんならびに官国幣社かんこくへいしやに勅使ちよくしを遣つかわされ、13日には大嘗祭だいじょうさいに先だつ鎮魂ちんこんの儀を行われ、14日には即位そくいの礼れいと共にご一代いちだいに一度いちどの盛典せいてんである大嘗祭だいじょうさいを行われた。

大嘗祭は、その都度、特に建てる大嘗宮だいじょうぐうで、悠紀ゆき、主基すきの斎田さいでんから納める新穀おさで造られた御飯しんこく つく、御酒みけを供そなえて、天皇みづから皇祖天照大神こうそ あまてらす おおみかみをはじめ、天地の神々をまつられて、みづからもお食べになる祭儀さいぎです。悠紀殿ゆきでんの儀と主基殿すきでんの儀があり、夕方あかつきから翌日の暁おこなにかけて行いうので、前者ぜんしやを宵の御儀よい おんぎと、後者こうしやを暁あかつきの御儀おんぎと申まします。即ち、大嘗祭は15日の午前4時30分いたに至いたって滞とどこおりなく終おえた。

大饗の儀

ついで、16,17日の両日にじょうりきゆうには二條離宮だいきやうで大饗りんじやうの儀が行われ、天皇は親しく臨場りんじやうされて、皇族、文武百官えん たまわおよび外国使臣いせ ぎやうこうに宴ばんを賜たまり、19日には伊勢いせに行幸ぎやうこう、20日から21日にかけて神宮じんぐうに親謁しんえつされ、22日にんこうに京都きんこうに還幸こうかく、更に24日から26日にかけては神武じんむ、明治めいじ、孝明こうめい、仁孝にんこう、光格こうかくの5天皇の山稜さんりやうに親謁しんえつ

## 第 18 話 明治天皇の崩御と大正天皇の即位

されて、大札が滞りなく終えたことを奉告された。

こうして、27日に京都の皇宮を發輦、名古屋離宮に駐泊の上、翌28日、宮城に還幸され、翌日、神鏡は温明殿に還御しました。29日、賢所御神楽の儀を行われ、30日に、天皇は皇靈殿神殿に親謁の儀を行われ、ここに全くご大札はめでたく終わりを告げたのです。

この間、国民はみな熱誠をこめて、歓喜、奉祝の意を表すると共に、いよいよ皇位の尊嚴を仰ぎました。

なお、翌大正5年11月3日、天皇は皇太子裕仁親王の為に立太子の礼を挙げられて、古来より、皇太子にお伝えすることになっている壺切の劔を、賢所大前において皇太子に授けられた。

( 第 18 話 明治天皇の崩御と大正天皇の即位 終わり。)

次は前頁に戻り、第 19 話 第一次大戦とわが国 )